

対人援助の基礎とアセスメントを学ぶ

「気づき・見立て・つなげる職員」を目指して

7月29日～30日の2日間、市町村協の中堅職員を対象とした県社協主催の研修会が開催され、約20名が参加しました。

山下興一郎氏（淑徳大学総合福祉学部准教授）と県内の市町村社協の先輩職員3名を講師に、対人援助における見立て（アセスメント）に必要な視点を学び、社協職員として求められる姿勢と行動について考えました。

「誰に対しても、どこで、何をするのか」を意識する

いま、社協職員に求められている個別支援・地域支援をどういった知識や技術を用いてすすめていくかについて考えたとき、まずは自分自身の姿勢として、自らが置かれている状況を客観視できるか、ということが前提になります。

「社協職員としての自分」と「人間としての自分」とで価値観が異なることを意識する

つまり、職員自身が、所属している組織の成り立ちや現在の課題、組織の構成員、地域社会の状況や社会資源等の環境、そして地域住民（組織）の活動状況や生活課題の両方をダイナミックに理解したうえで、そこで働く自身の役割（立場や組織、地域の中での立ち位置）を理解する

ことが重要です。

このように「自らと社協組織や職員関係」「自らと住民」「自らと関係機関」を理解したうえで、自身の守備範囲は何か、どのくらいの役割が期待されているのか、どのくらいの高みを目指すのかといったことを改めて自覚できれば、現時点では対応が難しい生活課題に対しても、どのように解決に導いていこうとするか

について、個別支援を通しての解決、社協内部での解決、関係機関との連携による解決等の各段階での役割が明らかになってきます。

それは、専門的知識、技術を使って支援しているとは自覚せず、感覚で支援してうまくいっている場合です。いずれにせよ人間が人間を支援しているわけですから、対人援助の知識・視点・技術を活かし、かつ、これまでの人生の中で培ってきた価値観・姿勢などをもつて支援している実態が多いと思われる所以で、社協職員はその時々において、最適な援助を実践するために自らを充分に意識し、実践していくことが求められます。

生活課題の解決について、答えは支援者側で決めるのではなく、その生き方を尊重して手助けしていくことが基本だとすると、社協職員

日々、気づき・考え・判断すること

はその人の生き方に共感し、あるいは生きにくさを追体験しながら、伴走してゆくといった態度での支援が重要になります。

そのとき、時として邪魔をするのは「自分自身の価値観」であることがあります。その人の生き方に共感できない時、「専門職（知識や技術を持つ）としての価値観」よりも「ひとりの人間としての価値観」によって考えてしまい、支援や支援におけるアセスメント（見立てる力）がぶれてしまう場合があります。また、その逆もあるかもしれません。

そこで、このサイクルを繰り返しわざわざに判断し、小さな対応をコツコツ積み上げていくこと。続ける習慣をつくることが必要です。その時、一つの答えや正解にこだわらずに判断し、小さな対応をコツコツ積み上げていくこと。

そして、このサイクルを繰り返していくことが、特に生活困窮者自立支援制度による対応や日常生活自立支援事業等の実践ではとても大切な観点です。

生活課題の核心を見立てる時のポイント

生活支援において、その課題の革新をどう見立てるか、どう気づいて判断するかについては、次の3点を意識して問題の見立てを行い実践していくことになります。

- その人は、自分のことがどのくらい自分でできるのか
- その人は、家族がいる場合はその支援力はどれくらいの強さなのか
- 地域資源（ボランティア団体や福祉施設、住民同士の支え合いの仕組み等）がどのくらいあるか



写真中央が講師の
山下興一郎氏

置かれている状況、生活力とあわせ、地域での支援力を見立てていきます。こうした分析をする際に必須なの

が「情報」であり、それをつなぎ合わせて気づいたり、判断をしていきます。す。情報は本人、関係機関、そして

住民から得ることができます。会議のほか、日常的な会話の中から得られる様々な情報を基に、支援が必要

としている人の問題の核心は何なのかを見極めることができます。ういう意識する習慣を身に付けることが必要です。

先輩職員から

「地域福祉活動の実践を通して感じていること」



遠野市社会福祉協議会 地域活動支援センター・遠野市ボランティア活動センター所長

高橋 洋子氏

まずは受け止める、
という姿勢で向き合う

みづくりが必要と感じています。

相談支援事業に関わる中で、相談に来られる方は、本当に困つて、様々な窓口を訪れ、協にたどり着く現状を見てきました。相談支援業務は成果が見えるまでに時間がかかるため、評価が得られにくいのですが、丁寧に対応しなければ信頼関係は築けません。

目の前の人にくまんと向き合

いの方が多い、登録している人も受け入れています。自宅に引きこもっている方が社会復帰を目指して、他者との交流や役割作りとともに生活リズムを改善するため、居場所として活用している例もあります。

地域には制度の狭間の問題が多くあります。日々の関わりの中で話を聞き、受け入れながら、どのように次の支援のステップに進めるべきか考えています。

地域づくりは、資源を活かし、住民とともに進める

長い間、登録している人も受け入れています。自宅に引きこもっている方が社会復帰を目指して、他者との交流や役割作りとともに生活リズムを改善するため、居場所として活用している例もあります。

地域には制度の狭間の問題が多くあります。日々の関わりの中で話を聞き、受け入れながら、どのように次の支援のステップに進めるべきか考えています。

昨年、秋田県の藤里町社協に伺い、地域の福祉ニーズは社協のすべての部署・窓口でキャッチできることを学びました。介護保険事業の担当職員等と地域福祉課の職員が、それぞれ得意な情報を共有し、個別支援から地域支援につながるような仕組

サロンで地域の方々のパワーを感じたり、苦悩して相談に来られた方が少しでも笑顔になって帰っていく姿を見たりすると、誰もが人との関わりの中で支え、支えられているのだといふことを実感します。

地域づくりは、資源を活かし、住民とともに進める



金石市社会福祉協議会 地域福祉課長兼生活ご安心センター副所長

社協の強みを活用し、活動の可能性を広げていく

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域づくりに向けていきたいと思っています。

仕事で困ったときは、職場だけでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントやきっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボランティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するように声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも

うです。震災対応を通して感じました。

う、社協として地域をどうアセスメントしていくかが課題です。震災以降、新たに生まれた様々な資源を活かしながら地域

づくりに向けていきたいと思つて

います。

仕事で困ったときは、職場だ

けでなく、他市町村社協ともつながってみるとことです。他市町

村の取組みをそのまま自分の地域で取り組むことは難しくても、仲間や先輩からヒントや

きっかけを得られるはずです。

東日本大震災直後は災害ボラ

ンティアセンターの担当をしていました。県内外から様々な支

援が入る中で、気をつけていたのは地域の元々持っている力を失わないようすることでした。

ボランティアが入る時も、地

元の住民と一緒に活動するよう

に声をかけたり、一度の交流で終わらせず、次につながりを持てるように工夫したりしました。

それは被災地だからといつて、全てを外部支援に頼つてはいけない、地元に根づくものを残さなければならない、といふ想いからです。外部からの協力をと地元の力の活用バランスを考えながら、日々地域支援を進めています。

宮古市社協では現在、地域福祉活動計画の策定に向けて住民アンケートや懇談会を実施しています。特に山間部の住民が生活への困りごとが多いのではないかと予想しましたが、必ずしもそうではありませんでした。そこで暮らし続けたいと感じているからこそ、住み続けていく工夫があるのかもしれません。

一方で、将来に不安があると答えた人は山間部に多く、住み慣れた地域に住み続けるよ

う使うかを決めていくのだと

うことも、震災対応を通して感じました。

社協は地域のニーズに合つて

いて、住民の同意を得ているも